

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

【高橋徳治商店（宮城県石巻市）・新工場落成特別号】

全国の仲間とともに、 7月から新工場が本格稼働します



2011年10月。被災した本社工場内に1ラインを復旧。供給再開した「おとうふ揚げ」の味にみんなが感動しました。

そして、震災から2年4ヶ月の今年7月。ついに新しい工場が稼働します。

その第一弾は、今回新登場の「**ネギちりめん揚げ**」。北海道のすけそうだらをベースに、ちりめんと新鮮なネギを練りこみ絶妙な塩加減、甘みを出しました。ひとつずつ「までい」（ていねい）に、じっくりの開発。感想お聞かせください。

新工場・稼働第一弾！



258 【新】ネギちりめん揚げ

■ 8/1回と8/2回のカタログを2冊同時に配布しています。

- ・8/1回と8/2回の注文用紙を同時にご提出頂きます。
- ・8/1回は通常通りの配達、8/2回は変則となります。

※ 8/2回の変則供給時の曜日、配達時間の目安については別紙にて後日お知らせ致します。

■ 「産地ビデオレター」を配信しています。

- ・今が旬の食材を生産している産地空のお便りを動画でお伝えしています。お申し込みは生協まで。
- ・生産者からのメッセージを聞いて、少しでも産地や生産者が近く感じられましたらうれしいです。
- ※ 配信登録された方には毎週お届けしますが、過去に配信したもの（バックナンバー）は、常総生協のホームページでどなたでも閲覧できます。

7月5日落成！ 高橋徳治商店・新工場（震災から2年4か月）

心寄せ、みんなで待ち続けた新工場が完成しました！

（宮城県・東松島市）



6月の試験製造を経て、本格的に稼働が始まる高橋徳治商店の新工場を訪問しました。

■新しい製造工場の完成です！

所在地は石巻の隣町の東松島市の高台にある工場団地内。鉄骨平屋建て、3300平方メートルの広々とした工場です。

工場設備は随所に高橋社長の思想が反映されています。例えば電気。原発の電気に今後頼ることがないように太陽光パネルを工場の屋根に1280枚敷き詰めました。「工場に必要な電力の2/3はまかなえる。本当は100%自前の太陽光発電でまかないたかったけどね」と高橋社長。

また、地下150mから年間を通して一定の温度の井戸水をくみ上げ空調に使用。結果、電気使用料を従来の20～30%削減。

工場内の機械の約8割は皆でヘドロから引き上げ、磨き上げ、2年かけて修理した機械です。

■やはり重要なのは「ひと」

落成式会場に向かうシャトルバスの中でのお話。丁度となりの席になった方が、工場建設に衛生設備面で関わった業者さんでした。その方が言うには、「高橋さんはとにかく最高の衛生設備を導入する。かまぼこ作るのにここまでやるか？というほどの徹底ぶり。普通はあそこまでやらない。やはり、無添加の食品を扱うから、最高の設備で作らないとならない気構えが他の業者と違うんだろうね」。さらに、「でもね、機械や設備だけが良くてダメなんだよ。それを扱うひとが一番重要なのは社長が一番良く分かっている。だから、設備にも増して社員への教育はすごい一生懸命だよ」。



この新しい工場を拠点に、今後も、高橋徳治商店のみならずさんと一緒に、組合員家族が感動する食べもの作りができるのがとても楽しみです。

（専務柿崎）

7月5日 新工場落成式

たくさんの仲間の支えでできた新工場。

手をつなぎ、感謝の気持ちでこれからも。

言葉を掛け合い、支え合った仲間のゆるぎない情熱と愛情が会場にあふれ、涙と笑いが展開された式典でした。

外は静かに振る小雨が緑を一層鮮やかに見せるものの、会場までの松島海岸一帯はまだ傷跡がそのままにありました。

先の見えない中で一步を踏み出し、安心の拠りどころである食べもの作りに出発されました。

支え合ったあの日、子ども達の笑顔に心が動いたあの時を忘れない。未来を諦めない多くの

仲間が、高橋徳治商店に集まり、心を響かせました。

未来をしっかり受け渡すためには、私たちも小さな力ながら手をつなぎ合い、感謝とありがとうの気持ちで大きな一歩へのご一緒をして参りたいと思います。

理事長 村井和美



【総代会の来賓ご挨拶にて】

姿勢を正して新しい未来に向かって、小さな光に。

高橋徳治商店 代表取締役 高橋 英雄



宮城県の石巻からまいりました。高橋徳治商店の高橋と申します。40回目の総代会おめでとうございます。40回目というのはすごいなと思うと同時に、先ほど魚住さんおっしゃっていましたが、赤字と黒字を織り交ぜてきちっとやってるっていう、素晴らしい生協だなと思います。

「常総生協は変わった生協」というお話がありましたけども、こんな生協が当たり前の生協になってほしいなと、私の強い希望でもあります。

私も石巻で被災して、被害は被災地の中でも大きかったと、よく言われます。

被災地はみなそれぞれ同じで、まだほぼ32万人の方が家を失っていると。16万人の方が放射能から避難していると。この現状を忘れてはいかんと。この現状に目をそむけずに、どんな情報でもいいから集めて、姿勢を正してほしい。

常総生協さんのテーマのひとつにもあります、「自分たちの暮らしを見直すんだ」という、「自分たちの日常を見直すんだ」ということをもう一度、被災地あるいは放射能から避難している方を通して、学んでほしい。

何もなくなったからこそ、もう一回自らの考えで、ゼロから考えなおしたい。

未来に、未来の子どもたちに何かを残す。次世代に残す。言葉はいいんです（いらななんです）。具体的に何が出来るかということ、本当に考えないと、ますます目をそむけた、ほっかむりして布団被ってひどいことが過ぎるのを待つようになってしまいます。本当に、何を残すか。

そういう意味で、常総生協の総代会でいろんなテーマが議論されています。組合員の皆さんは素晴らしい知恵をたくさん持っている。生産者の方も、私も生産者の一人ですが、姿勢を正し

て、それで自分たちの生産物がただ、口に入るということだけでなく、それがどういった意味を持つのかということ、またもっともつと深めるということがどういう事につながっていくのかということも、もう一回ゼロから考えて行きたい。

そうじゃないと、これだけのことがあって、なにもしなかったでは済まない。まだ終わっていない。我々の心の問題、それから放射能の被害。

それからこの現実から目をそむけて生きられない。知らんふりして何もなかったことにできない。ずっとこれは嫌だろうけども苦しいだろうけども、見たくないだろうけども、自分たちの問題としてぜひとらえてください。そうじゃないと浮かばれないじゃないですか。

私たちは、新しい未来に向かって、少しでもいいから小さな「光」になろうと。

そういう意味で私は新工場を作ることに決めました。同時に皆さんのたくさんの支援で。「なんで（被災した工場の支援に）来て頂けるのかな」ってホント思いました。石岡の魚住さんが（魚住さんの）息子さんを怒鳴ってました。「そんな仕事でがれき片付けてどうすんだ！」と。でも一生懸命仕事してくれました。生協の職員さんも来てくれました。なぜ来てくれたのかな。私なりに考えましたけども、皆それぞれが祈りを持ってきてくれたのかな。自分たちの、自らの問題としても来てくれたのかなと、そういう風に今は判断します。

長くなりましたが、本当に熱い生協だなと、思いました。

自らのこととして、新工場を喜んでいただいた。立ち直るのを喜んでいただいた。熱い生協だな。

ぜひその感性と、熱い心をずっと長く続けてください。ありがとうございます。

これからの若い人、歴史をぜひ学んでください。

語り手 川津皓二さん(土浦市在住)

■戦時中の子ども

戦争が終わるころ僕は4年生でした。(子ども用の)戦闘帽は売っていないのでみんなお母さんが作ってくれる。戦争前はランドセルだったが、戦争がひどくなると「たすき掛け」になった。靴なんかないから下駄ばきです。後ろに背負ってるのは綿を布に入れて作った防空頭巾。米軍が爆弾を落としたり、機銃掃射で襲ってくる。そういう時に脳天を守るためにいつも持っていた。

今でも覚えている一番悔しかったことは、お弁当箱をとられたこと。といっても誰かに盗られたわけではなく、国の命令で出さなきゃならなかった。僕のお弁当箱は東京のおばさんがお土産にくれたきれいな銀色のアルマイトだった。それを大切に使っていた。学校からの命令で武器にする金属が足りないの、みんな出しなさいと。私達みんな、教室の隅に置いた。学生服のボタンが金ボタンだったのでそれも全て出しなさいと。後で木のボタンに変えられた。戦争というのは兵隊さんが死んだり、家が焼かれたりするが、普通の人もみんなひどいめにあった。「政府、軍の命令によって」という記憶がある。



■戦時中の暮らし

米の代わりに芋を食べる。今みたいなおいしいサツマイモではなく「茨城1号」という甘くもなるともないもの。ご飯がないのでお弁当にはサツマイモを持って行った。イナゴやドングリをとってきて茹でて食べたり。着るものもなかった。そういう時代に子ども時代を送った。

私の母が子ども達のいろいろなものをもっておいでくれた。蔵の中に5人兄弟のものを全部とっておいてくれた。それが出てきたので余計に当時を思い出すことができた。おふくろが大事にしていたものがある。

お米は配給と言ってひとり1か月に二合三尺、薪の配給。町のある場所で並んでもらった。着るものは衣料切符というものがあつた。読んでみます。「今年度は衣料切符の点数も少なくなりましたので、皆さんはいま一層衣料品の消費節約と手持ち品の補修活用に心がけ、決戦下の生活を闘い抜いてください」。要は我慢して繕って着て、闘いに勝つんだから我慢しろとこうゆうことが書いてある。今のようにお店に行って好きなものを何でも買えるということはない、お店自体がない。着るもの

から食べるもの全て制限されていた。

親は子供に食べさせるためにほとんど食べていなかった。私の茶碗には豆だらけのごはん、おふくろの茶碗にはイモだけ。それから電気もなくなりますからろうそく。それから家の庭には防空壕。敵にやられたときに逃げ込む。父親と兄貴と僕とでシャベルで掘った。米軍の飛行機が来るとサイレン(空襲警報)が鳴る。すると子ども達は逃げ込む。一番下が妹で後はみんな男兄弟。この妹が昭和19年に糖分不足でぐったりしてしまった。危なかった。終戦後、17歳の時から戦争に出ていた一番上の兄が帰ってきた。ボロボロの服のまま、小さな袋に砂糖を入れて帰ってきた。妹に砂糖をなめさせて回復した。



■戦時中の教育

教科の中に「国民科」というのがある。その中に、修身(しゅうしん。今の道徳のようなもの)、国語、国史、地理がある。体練科は、女の子はなぎなた、男の子は竹ざおで敵を殺す練習。今と全然違う教科が書いてある。戦争中は今とは全然違う育てられ方をしたんだとわかる。124代までの天皇の名前、教科書をあけると最初に天皇の名前がずらっと並んでいる。もっとすごいのは修身と言ったでしょ。その最初に教育勅語が載っていた。家族を大切にとか書いてあるけど最後にはいったん何かあれば戦争に行けとあつた。とんでもないものだった。意味は分からないが覚えさせられた。

■若い人には歴史を学んでほしい

平和憲法を修正しようと言っている人がいますが、結局、本当に体験していない人には戦争は勝った方も負けた方もどうしようもないということがわかっていないと思う。

孫たちの世代はどうなっていくのかなと思う。若い人たちに言いたいのは歴史を学んでほしい。一番簡単なのはまず詳しい年表を買い入れて年表で。年表の次は近現代史の歴史を学んでほしい。



■川津皓二さん

1935年(昭和10年)生まれ。78歳。元・小中学校の教員。著書は「民主主義はジープに乗ってやってきた」など。